

多々い様に

八重作戦は其は洞窟内の其溝に物部が
考へておける様なものである
としかして其溝は長は六

この堅壘に敵の上陸する苦のな
最後 木をみちんだよ
上陸した

八重作戦は六子

陣地におし敵のいくら
砲撃をしてもびくともするものはない

假りに上陸しても敵は南部主陣地帯を

監視するに止め形も整備して次期

作戦行動に出るにらうから 我軍は安泰

敵の陣地に砲撃をしても其も射して

はいけな

此の考へ方の内容は独り角力の考へ方であつた
實際は 未だに敵のいとは六子に保持 希望的状況
実現と一之我術的に結つけこの考へ方
ある。

中絶軍としてはむしろ 未攻の山頂の許に迄この

考へ方とてまとめおくべきあり 主陣地に

未攻せぬ場合ならば百に一つの方策であつて

此の様な場合はむしろ 或る種の我略構想

の下に思ひ切りに施すを度すまいである。

又陣地の堅固とは 数十米の地下に掘った地道

の十六坪の砲撃や五百発、一毛の焼弾に堪え

られる大の事とて六子のいあらふ。

火力及び揮の陣地や之に即応した火器の配置
や部隊の移動の加味士を付けは決して
堅固な陣地とは云ひ得なからう
敵の来たるべき時を以ては耐弾力の強さを
と敵にいはなく味方に誇ると云ふ事は敢に
我意や作戦指導の信念に或る脆弱さ
を包蔵してあると見做されても止むを得な
からう。
如何なる高級な作戦や戦術も要は敵に
対してあり味方に対しては無い
私は實際戦術の作戦間この首脳部の
胸を流れる或る筋と我つて来らう
敵と我子のなうまたしも友軍内の或る

思想的な動向におしき量的に我つて
来に様である従つて或る純然なる地上軍
自体の立場よりすれば純然たる言動や
我力を効めることの結果になつたのはなかりかと
及者上れもする 何と云へば 我戦は
よくても悪くても一途の方針に極めし
強固な団結と必要としたらある。
何れにしても作戦第一日に首脳部に或る種の
諦観を合人が筋気の如くに遊泳してゐた
と云ふ風に考へるにはあるがたつたに
軍司令官は後から考へてみても或る我々の
帰趨を既に察してあり大西郷の城山の
心境に悟達してゐるいはなるからうかと云ふ

甘即かたのいともなるに似しこれモ大西郷の塚山
この総帥として、能くはあつたはともあれ
現代軍の司令官はと具似るべきはななく
凡有る方策を多量し、敵に障あらはれ
すに之に乘じ、我々に少しも希望の囁き
かあるならん凡有る手を打つて我勝に
努力すんまはらう。軍人の人格とは我々に
勝つ、勝つる努力をすること、第一あり
釈迦や孔子や基督的な人格は決して
ない善いある。

早僧君

早僧君との本合つたのは三月二日、百里の
洞窟司令部である。私の展望所や舟渡空
の間、おれは、しつ往復してゐた。子と見ると軍装
の早僧君と瞳の合つた
「オソ、書い様。」
陸軍士官学校の校舎は、
昔に隣中隊隊に下宿の同じで、日曜になると
帰校の限すれぐに走つたものな
卒業以来は、いじめのめり合ひである
あつては、紅顔の美少年で、何なるもに
してゐる。十数年後のあの年の風事は

たくまじい。思慮分別のある面構えであった。
歩はよの校教官として各部隊に歩は歩の
伝習教官に来て。やうと任務を終り今日帰る
ところだ。と云ふ子。

「俺はね、砲工学校と卒業して間もなく
航空に専科してね。この軍司令部に着任
して間もないんだよ」とあらまこと云うた。
飛立若し保たうとし。機会と見て飛り機
の優劣の内に帰らうと約束した。
数日間彼は同校の陸軍にこまに甲隊と
伴ひ。若し保の空の「陽」に我況を被望し
てゐた。然るに沖絶に於ける唯一の同期生と
あつた。何と同期生のよしみとを發揮したか。

のたけやとも一日々々と我況は激烈になる。計り
飛び坊のう連絡機を飛ぶと出る機会も少く
なつて来た。特攻隊のボックル。我を現はし
業務の激化して来るに従ひ内地帰還の望み
も望み様になつて来た。ちのし。私と妹と眼を見
合はせるにニヤリと笑ふ事はあつても笑つて
帰還の事を口にあす様は事は無かつた。
勿体ない。器量の人柄をばせはりけないと
思ふたし。幸傳君も何の仕事をしてる様よ
と云つてもあつた。私に或る時二人で話合
つて見る事にした。

「我は激しくなる。沖絶の勝敗は直接我軍
の結に連つてゐる様に思ふ。俺も此処で

一代の働きをいして見るに首肯する

就とは其見解も一徳にやうに見えりしが、松本は

第四の衣目には、松本はあるなりとて、松本は

の号用には、松本は好適とは思ふが、

俺の節緒が一つ余つてあるから上げ様、松本は

若し謀任命は、松本は軍若謀長に請として、松本は

やつと世々えると思ふ、

彼ほじつと私の請をまゐるに、松本は澄んだ目と

私を見つめ直して言つた、

「是ね、やうして思ひ切つて、松本は見よう」

私は長若謀長に直ちに意見見申すとした、

若謀長も司令官も大喜びした、

「それか、やつと世々えるか、」

彼は直ぐ私の節緒を取めし、松本は席につけて

知念半島の陣取を準備してある、松本は松田司令部

にかけつけた、

鈴木松田長も大喜びした、松本はほんとうにうかしやう

に恥と云ふことよこした、

上官によろこばれ、松本は本人もよろこんで、松本は我子事に

なつたのだ、

そやう、彼の猛進の始まつた、松本は若松田長

と物味になつて助けた、

彼は歩兵隊中の造詣の深かつたし、勇猛

沈著であつた、

艦砲や爆撃機の機列の中を、松本は何れも

歩兵隊の校隊のつれて来た、松本は司令官代りに

この軍の裏に別々たるに軍迫のあつたし
今や勝つと敗れるとの去子被念から起る
としてゐる様であつた

知念半島の守陣に供してゐる第四十四旅団は
作戦の初期には別に任務のあるわけをもなく
坂根即志の鋭い勢にあつて隊長を斃望して
ゐる大いであつたが、子傳若澤はさうゆう
わけには行かぬかつた。首里一帯の地を
守備してゐる第六十二師団の隊員を研究し
その戦訓を大むとなく集めて旅団の戦後
の隊員を教育して後進を促した。旅団の戦後
命と船に供く隊士の服支には鷹の眼の標

銃士を増して来た
日か至つにつれて是れ漢部に来る回数も少くなつたの
会子度には温和な顔親が仕組な面持に変わ
その行動も雋敏を極めた
五月初旬軍の総攻勢に軽し様としたが
彼の兵団は第三師団として首里南側如こ
に位置を移し南進侵すした。松田司令部
は通信の便宜上軍司令部の若漢部の
傍に位置した。そのお彼と私は今迄より
話し合子機会が多くなつた
お互いに不精戡の甲から青白い眼を
ニヤリと微笑した。私は軍兵は洋たから
此処で
隊の抜く事に少しも遺憾はないけれど

彼に第一の事いふつらう といふ子 一種の子
守の士つと頭の隅と過また
彼は竊かに私にいつた

「私は飽くまで此処に我子 たこの我子の
様子、我訓と何なる内通の軍や歩兵よ
校に依えるまに一端に連れし末に中隊と
帰還せしめたいんだがね」 ちよ、我子に

おする執心と真情のめそのお言ひであつた
その頃は未だその様子を事に因するまゝも
無かつたし 我校が我校に立つのが 彼の意見と
是れ深長に上申するのは過早とも 思ふたのが
実は善控えたい 後になつたかう 彼の念願の
叶ふ 若し甲隊は難行して内通に帰る

その甲隊は恐らく辛僧に代りよの我子に
因する資料とあますところなく伝えたであらうし
今とならば辛僧と真に再生の恩人として
異名を拜する事であらう

能攻勢はある事情の故 挫折した敵は我の
挫折直後 西海軍に依りて攻勢を再生して
末に 第六十師団左翼方面は海軍に協定を
望む 我は攻勢のものは辛子に守勢を係す
攻勢の支持とつたるたの攻勢が甲にされ
敵の我な攻勢に對しては 善務部となつてゐた
敵の攻勢を兵とつたみに変更して 末にわけを
あり 軍主力の左側が危険に曝され
末に 第四十四旅団はこの危険を排除する

お、この上面に投入せられた 旅団としては初めの
激戦である。天久地との四日間の苛烈な戦は
我々が続いた。

圧倒的な火力。と口には云子けれど、鉄片と
火の海に天久の高地は昼と夜となく続く
西復はれる。送警しこめる心算の旅団は、何所の
間にガジリリ〜としうずしうずの間、一寸刻み
五分刻みに退りこつてゐると云子より押し
返されこめる。もう駄目かと思つてゐると
夕方にもなると泥の中からもく〜と舟達
か立ち上つて、局部的に血も散れある陣地回復
攻撃がはいまる。昼は押し返れ、夜は回復する。
攻め方のポストに運動がはいまつた。

こやを支援する軍砲はあまりの激しさに
面をむけることも射撃をすることも困難で
歩兵独力の戦いが続いた。
壕から壕へ、弾痕から弾痕へ、島の
様な早急な第一陣を指導してゐる幸傳
兵隊は、いさゝか鬼神の姿であつた。
旅団とは云え、独りよ兵四ヶ大隊よりなる
少佐団にはあつた。鈴木支隊軍と
幸傳兵隊の名コンビは、敵をこ
力こゝとする。天久高地攻略を断念せし
めた。此の激戦に於ける幸傳兵隊
の武略と勇気は、絶頂のものであつたらう。
又、この長年、歩兵学校で研究した歩兵

我術の精髄にもあつたにせう
軍の兵部部の昇昇に於けると尊このハミ
要塞の攻略に於ける 浮丸密攻の約四十倍に
あると云ふ。

その濃密なる方力の甲乙も要塞なるに
野兵陣地に於ける 我々指揮はらしく
想像に絶するものもあつた。

敵の攻撃のしんじ 司令部に彼の来に
焼けるにけし様な 泥だらけの軍服で
頬の肉の削げ 寒我苦闘は聞かなくとも
幸せうなる。唯 眼丈は澄んじ居り居れた
頬に微笑のほんじめるに 二人が黙つて
まを握り合つた。

彼の終始ははつたりもなく 尊大も誇大も
まして 雄弁もなかつた 黙々として 自分の任務
に良心的に没入して行つた 典型的な
野戦の武人であつた 日本が勝つてゐたら
最高の讚賞を以てする 感収を授け
たかこゝろに違ひない。

その彼は今や居ない。まして彼と別離は
私の特別な死る任務の因縁と云ふ
事と別離する事と云ふに
私の心はく 軍司令部を去るまに準備
中 彼はソツと来て号した。それは首里の
攻防の最後の段階に来たのみ 軍管理
部長の考案の密令であつた 既に摩文

仁附近に軍ヲ司令部の筆ヲ定地を物色
し様と云子「我軍の腹にあり」
第四十四旅団は天久古町の敵我に我力半減
したるも復一流の指導に我力の速復
してゐる。
復は「おそろく私の任務の内容は知らなかつた
らう。帰還と云子事丈を知つてゐたが
らう」。
微笑するのう「私の手を固く握ッしめ
さ、や」
「しつかりやれよ。成ゆを祈るよ」
旅団長もよろしく「うつこゝるよ
それ、彼と私の最後の別離にあり」

67.
彼の最後は知らな「我が終つて人々に
「軍と云ころに」と 軍の南東に陣取を
変更しこのうの 旅団は 睦路に傳
「お鬼神の果れ方であつた様だ」
と兵力と支那増加する米軍に対し手負
の「右に左に飛んで苦闘し果て狂つた
と云子。弾丸も少かつたらうし 兵員も少かつた。
「お和な武人の皆を決し。お平洋の
「お清を背に敵を睥睨しつゝ
軍刀を握つてゐる姿 敵の「浮に
一歩もおぬする事なく、 黙つて働いて
黙つて「死んで行つた「お僧君の姿
想像する「おは絶極りないものを

あつた。
君よ睨ませよ。

司令部対司令部（其一）

我々の命令は「各級指揮官」と云ふ節を通過して
下級部隊に浸透してゆく。中隊附近に敵に去血
強要」と云ふ仕組な企図は台場方面軍を通過し
軍司令部に、そして師団司令部その他の部隊本部を
通じ一先は下級各部隊に通じてゐた。
しかしそれは飽くまで表向きのものである。
司令部の空軍といふものはいかなる命令でも変ら
ない。司令部の空軍は当面の敵情に依つて変り
作戦指導の權威に心服するが、面従するに
依つて変わる丈である。
沖隊司令部の空軍はその編成の端に於いて
孤獨であり、作戦構想に對する又操心の中心に

よつと運送的であつた。それの沖繩作戦の終始
を通過して現はれしめる。

台湾方面軍から見ると沖繩軍は手に負えない
といふ手のとびのまゝといふところにある。嘘つき
のやれしあつたようにだ。

それは北甲総り坊の守備乃至敵の使用妨害
といふ事にあつた。沖繩の守備兵力の問題は
別として「有力な部隊が及撃」「遠我砲撃で
占領妨害」「舟艇部隊の送上陸」といふ軍の
作戦指導の要領書で方面軍は瞞着せられて
蓋しをあげて見せ掛つた様子であつた。
又幾度の攻勢移転の送電と放送して
一度も真面目な攻勢を逆襲もつた。

情勢の變化による中絶といふ一方の要領で
文部省に送電された。その様な事か何かが
あつた。方面軍は軍の信頼を失ふた。何ら
又軍から見ると方面軍は海軍の立場に
あるといふ条件は百も承知してゐる。方
軍のおに何七やつとせよたないといふ
気が持たあり、方面軍の命令をまじりも別
勝てるわけはないといふ様な気が持た多
に却つてゐた。

殊に四月下旬に方面軍は大本營の激
電報に尻を叩かれ

「四月日と期し、
すへし」て子命令を軍にまじりあつた。

に向い攻撃を
進

これより方面軍の要請による命令が下る
聯隊長の大隊長が中隊長に交代し命令を
下す。軍配がある。

事實 方面軍の能力もその程であつたかも知れぬ。
何れにせよ方面軍と軍、両司令部は両者
相拮抗してゐたと云ふのが真相であつた。

軍と師団の関係は如何であらうか。
作戦開始前の師団長と軍は謀長の「お持の上」
疎隔は別として。作戦第一日に

第三十四師団長謀部から次の様な電話が来た
「軍の状況判断如何。師団は如何なる任務を
遂行すべしと懇請あり」この電話は普通
当然の事。何等非難する事はない。その

意思が野郎に在る裡に攻勢でも考へたところだと
云ふに取願の汲みと云ふ。後に攻勢移転命令
の際 師団長は攻勢自信なしと甚固と表明し
作戦を謀は泣きさへをこらした。無傷の師団
の何日か全つてこの様に志を挫き、約交
してしまつたのは何故であつたらうか。

再三再四に及ぶ攻勢移転や大規模な送還
作戦の計画と命令とのあまりに簡單に
変更中止になり或いは軍命令と全く
異なる幕僚による作戦指導、それらの
合つて軍に對する信頼の失くなり、
權威の消滅と云ふに云ふ他はない。
この様な事例は枚挙にいとまがない。

方面軍と軍の拮抗は三つある、軍と伊田の間の対立になつてゐる。このほか、その姿があつた。総じて上級司令部と端末司令部の間に一貫した太い筋の助けがつけられたと云ふ事にならう。作戦は一種の思想、戦がある。軍の作戦思想の堅固である。一貫してゐる。どうして情熱を傾けつゝ、戦える。どうして作戦思想の一致する。戦に勝つる道理がある。わけがある。

司令部対司令部 (其二)

拮抗や及撥や懐疑懐測と云ふ様なるすつてりしない事柄は勿論、司令部相互許りではない。その当時は不明なから、戦の終つて種々の資料に當つて見ると、敵味方の司令部は互いに敵の動きを見誤つたり、誤りや犯し合つてゐる。

沖繩作戦の事実さうであつた。

米軍の何故攻撃の初動から強烈なる圧倒的な火力で、その執念的強襲による上陸作戦を行はなかつたか、あつたか、数隻の軍艦と数隻の空母のあり様か

数日間殆ど無価値に等しい砲撃戦を繰り進めた。威力捜索と女子にはあまりに子供じみた仕草である。これは心理的に日本軍の怖ろしかつたろう。何れも触つて見なければ次の手が打たないと言子も保持に左右されたのであろう。

あの初動の時期、米軍がさざるく、頭をもたげはじめた頃、日本軍の有力な部隊を以つて短打作戦をやさめたら、事態の推移は測り知れぬものがあったらう。

平莫平の横綱に力では勝たない、我族を利用し或いは自ら好機を醸成してその虚隙に果する以外に手はない。日本軍は我族を利用

することも之を自ら作らうとする、我略的な意図のなかつたことだつても過言いはあるまい。更に米軍の如く、さざるく、兵力を集中して効果のあるかたの成せざるなく、一般に作戦の開始したと思はれ、も仕方のあるまい。中絶作戦の第一章は敵味方司令部のすれちがひの開始されたのであつた。



四月日米軍は嘉手紐沖に兵力を集中し北中及び坊方面に、かに地獄もいく人と思はれる砲撃戦を開始した。陸の面の準備砲撃戦である。

日本軍は歩兵一大隊、加賀分大隊の監視
してゐる。又、あとは一般の部隊が各銃火
は特設混成旅団と附せられ、銃砲を持たず
穴居してゐる。

沖波の司令部の言葉はかうであつた。

「空陣地に莫大な物は置てうち、人ご馬車
なる奴だ。我の陽動にまんまとひつかつた」
しかしこの言葉は実は敵に対する冷笑
ではなく、莫大な砲撃弾、自分の身の上に
ふりかへて来る、幸に依つて得た、はかない安心
感、おろする、自慰的なる言葉の、過ぶる、
冷笑の言葉の裏には、あかしの弾丸を
うけたらう、ひいては目に会ふ、と、言ふ、切實な

危険を隠してゐる、こゝには、
ない。

敵の意表に出る事は勝を得る要道である、と
我術書の第一頁に教えらるゝのである。しかし
意表に出る手段に於て、設つてゐる、逆の
作用をもたらさうとする。

その手段に「威力」、其の場合の最も簡明なる
場合である。

以下は上陸後の米軍の心理の推測である。

海山平附近の空陣構の教用の要
日本の精鋭は、度々海上をにらんでゐる。
日本軍は、近接戦以外に射撃をしない。

らう。陣前に米軍をひきつけ身動きを
しない様にした。あつて撤収した射撃と
かえるたう。

米軍はから判断せしや否や日本軍の
沈黙はうすまみ悪い限りあつた。

凡有るよりを撃つて日本軍陣地を覆滅
してミヤウ舟艇上陸し様とミヤウ許辺の

艦砲と様子の開始した日本軍からは
一歩の射撃もまこえな

米軍はミヤウミヤウのミヤウミヤウ
力強くミヤウミヤウミヤウミヤウミヤウ

あつたミヤウミヤウミヤウミヤウミヤウ
海流は一歩の射撃もうけな

橋頭堡

とつるあ第一部隊は前進する細心の注意
と周知の用意を一歩一歩前進する

無人の境を行く如く薄気味悪いこと
この上なる

の数歩一歩一歩一歩一歩一歩一歩一歩

日本軍はこの地帯に戦兵してゐるかつたの
あると。

しかし日本軍は意表に出たかあり
米軍は意表に出れにわけがある。

しかしこの意表作戦には武力を伴つて
ゐるかつた。

不安一安心一翻表一悔つと米軍の

降兵モ司令部も心理的に迅速にまつて行く

恐らく沖鋒隊が米軍はこの上陸日に
に必勝の信念をうしもの。優越感うしもの
得たであろう。

日米両軍司令部の相対の不安感はいの
均衡を破ったかはあるまいか。
均衡の破れた両軍司令部の不安感
もともにもどすにはよほどの
自うと欺りに大報は至大である。

ビール大王
プシロヒゲキキレ、やせ
だけし
の味



★アップのさいた本場の味★
サッポロビール
北海道及びドイツの
アップを使って醸造
された本場の味です

「第一陣送還者三百名は、今夕六時釜山を出
発します。これから船名を呼びますから、呼
ばれた方は、すぐ荷造りして正門のところに
並んで下さい。長い間御苦勞様でした」
彼は言い終るとベコリと叩頭した。抑留中
公然と韓国官吏からお辞儀をされたのは、こ
の時が最初で最後だった。

やがてわれわれは、赤十字給身の黒い韓国
服を着用し、荷物をまとめて所内正門前に四
列縦隊となった。残留組も二、三日中に捕囚
できるといふので、皆にこやかに見送ってい
る。と列の最先端から絶叫する声が聞えた。
「地獄の門が開いたぞおっマァ」
その叫びは、言葉では到底表現のできぬ強
い歓喜と深い感慨を併べていた。列の後面に
いた私は伸び上って見ると、背にわれわれの
ために開いたことのない正門の鉄扉が大きく
ひらかれているではないか！
「門があいたア！」
「見る、不開の門がとうとうあいたぞ！」
叫びは喊声となり、さらに泣き声と交った。
私の胸は、熱い血が首をたてて突き上げ、

きた。この瞬間！この瞬間を私は脈にひと
しい抜いを受けながら三年有餘待ちに待った
のだ。誰かが最初に絶叫した「地獄の門があ
いたぞおっマァ」という声を、私は一生忘れな
いだらう。
こうしてわれわれは、今年の二月日本へ帰
ってきた。故国は温かく迎えてくれた。だが、
われわれは船なき船員である。身体も痛んで
いる。夢にも忘れなかつた懐しい祖国にわれ
われを待っていたものは、失業と窮乏！。
しかし、私は骨の髄まで潮の香の跡み通っ
た男なのだ。一日も早く、また海へ帰ってゆ
きたいと思っている。自由なる海に。
(本手記は山本氏が抑留中韓と密に書きたったもので、
原文は長大なため本誌がその一部を採録したものです)

75~1

1945年に戦われた

史上最大の海空死闘

—沖繩占領「米山作戦」の全貌—

ハンソン・W・ポールドウィン
ポールドウィン



著者紹介

ハンソン・W・ポールドウィン氏は、今年五十五歳。はじめ海軍を志して海軍中尉にまで進んだが、転じて新聞記者となり、現在ニューヨーク・タイムズの軍事部長。第二次大戦当時の報道によってピューリッツアー賞をついた。軍事全般の評論では世

界的名声があり、東西両陣営の戦況を分析しても、精確透徹、有識者の高い評価をかち得ている。著書十一冊

ここに紹介した記事は、一九五六年出版された『Sea Fights and Shipwrecks』のうち『The Greatest Sea-Air Battle in History—1945』の項を訳したものである。





これは、第二次大戦における、「最後の戦闘」の物語である。びょうとして東支那海に浮ぶ沖繩をめぐり、死すとも守所を離れまいとして来攻した米艦艇と、日本のカミカゼとの間に戦われた死闘である。——ウィンストン・チャーチルが、「史上もつとも激烈、もつとも有名な戦い」であると述べた、その凄烈な戦いである。

不気味な沈黙

一九四五年四月一日、復活祭の日。戦争のさ中でありながらも、世界の人びとが静かな祈りに過ごし、希みによみがえるこの聖なる日曜日、この日、東支那海は輝やくような日であった。
海原は鏡のように、吹く風はつめたく、視野は遠くひらけ、陽は強く照っていた。
遙かなる沖繩——間もなくアメリカ人の伝統を継りなす不滅の糸になろうとする沖繩の断崖が、うっすらと、水平線に浮んでいる。
史上最大の艦隊——四十隻を超える航空母艦、十八隻の戦艦、二百隻の駆逐艦、数百隻の輸送艦、巡洋艦、補給船、設備艦、潜水艦、

掃海艇、砲艇、上陸用船艇、哨戒艇、救難艇、工作艦——十八万三千名の上陸部隊をのせた千三百二十一隻あまりの艦船が、日本帝国の領海深く進軍しつつある。
目的は、「水山作戦」——沖繩占領である。

数カ月にわたった徹底的な作戦準備と、数週間におよんだ鋭い緊迫感とは、いつの瞬間にもかならず付随するもので、「水山作戦」の場合も同じだった。が、いざ作戦が発動され、部隊が動き出してみると、そこに展開された状況は、「クライマックス」というにはまるでふさわしくなかった。

——沖合い遠く、武蔵に輝やく第五十八機動部隊がはしっている。機長官は、「ピートレミンチャー、あたまの尖った野球帽をかぶり、小鬼のような顔を引き集める。
南の方、東支那海のうねりが、八重山群島と台湾の岩層に砕けるあたり、はじめて太平洋戦場に作戦するイギリス軍機動部隊が、行動し、日本軍飛行場を襲撃する。
第一上陸点（ブルー・ビーチ）と第二上陸点（パープル・ビーチ）の沖には、輸送船艇と上陸用舟艇が群り、のせてきた海兵隊と輸

76~1

軍の上陸部隊を、うそのようにらくらくとおろす。無数の小艇、上陸用舟艇が、まっ白なウェーキを曳き、鮮烈な海面を縫って走る。

遠く、戦艦群の砲火が閃き、いんいんたる砲声がとどろく——が、それは、敵にあらず、アメリカの砲撃である。空には飛行機群が急降下し、旋回し、爆撃する——が、これもアメリカの飛行機である。

敵は、不気味に沈黙する。

沖縄の、こぶのような形の丘に登った第七師団の歩兵の一人は、いかにも拍子抜けのしたように、目をこすりつつ、こういう。「えらく生き延びたもんだ。とうにもう、死んでると思ったが……」

裏をかかれた見張り

沖縄は、九州から南に伸びる琉球列島の最大の島。周囲に珊瑚礁をめぐらし、トカゲのような形をしている。

長さは約六十マイル。幅は二マイルから、広いところで十八マイル。

その幅二マイルにくびれたあたりで、北部の、こつこつした山並みに霧蒼と樹木を茂ら

せた山岳地帯と、南部の、全島の三分の一にあたるゆるやかな起伏の丘陵地帯とに分れる。

南部地区には、断崖と峡谷が連なり、古代からの沖縄人の墳墓と鍾乳洞が点在し、その合間、耕作できる土地という土地には、砂糖黍や甘藷や米や大豆が植えつけてある。その南部地区に、日本軍は、主防線構築していたのである。

いったい、沖縄攻略は、アメリカの大軍洋戦を推し進めていくと、必然、起つてこなければならぬ作戦である。

——ここからすれば、日本本土は中型爆撃機の攻撃圏内に入る。マリアナ基地から飛ぶB29の本土攻撃をさらに強化するため、あらたに七百八十機の爆撃機が、沖縄に配備できる見込みだった。

また沖縄と、その周辺の島々から作戦する飛行機と艦船は、日本の海上交通路を、一つ余さず寸断できる。しかもその年の十一月一日に予定されていたオリンピック作戦、すなわち九州侵攻作戦の目的地である九州へは三百五十マイルの距離であり、その作戦の副強足がかりになる。

結果から見れば、日本は、沖縄占領後二ヶ月足らずで和平の構えをしたのだから、あるいは沖縄攻略は、「連合軍が最後の勝利を得るためにどうしてもやらなければならぬ作戦ではなかった」といえるかもしれない。

しかし、当時、軍人たちの意見では、日本はさらに少なくとも一年、ないし一年半は戦うだろう、というのが常識だった。さらに沖縄の失陥が、日本の降伏を早めた大きな原因となったことは間違いない。日本の軍閥主義者たちは、無条件降伏でなく、無理にも相対すくの商談講和に持ちこもうとして、死物狂いの努力をしていた。その望みは、ふつつり、沖縄で切れてしまった。

はじめ、この侵攻は、一カ月足らずで終る短期作戦と考えられていた。アメリカ情報部の見張りによると、日本軍が沖縄に配備している兵力は、約五万五千から六万五千名で、砲は、大きなもの百九十八門といわれた。

この見張りは、間もなく敵に完全に裏をかかれていたことがわかり、はじめの簡単に勝てるという望みなどは、いっぺんに吹き飛んでしまった。このあと、十一万以上の日本人が死に、七千四百が投降する。二万六千以上